



企画展

原始人の知恵と工夫

天然素材(貝殻・骨・角・牙)の活用

開催期間 2008年9月30日(火)
～11月3日(月)



沖縄県立埋蔵文化財センター

ごあいさつ	1
展示のあらまし	2
実用品	4
非実用品	8
貝の交易	12
おわりに	15
展示遺物の出土した遺跡	16
参考文献	18

凡例

1. 本書は、沖縄県立埋蔵文化財センターの企画展「原始人の知恵と工夫 一天然素材（貝殻・骨・角・牙）の活用ー」を補完するものとして編集した。
 2. 許可なく本書の複製および転載、複写を禁ずる。

ごあいさつ

企画展「原始人の知恵と工夫—天然素材（貝殻・骨・角・牙）の活用—」の開催にあたり、ごあいさつを申し上げます。

沖縄の島々は周囲をサンゴ礁の海に囲まれています。先史時代の人々もこの豊かな海の恵みを得ながら、生活を送っていたことでしょう。その証に、多くの遺跡から貝や貝製品が出土し、沖縄諸島の先史時代のことを「貝塚時代」とも称します。

貝は食糧という役割を担うだけではなく、実にさまざまな道具や装身具として活用されてきました。実用的な貝匙や貝製利器、漁網の貝錘などに加工されたほかに、装身具としては貝輪（腕輪）や指輪、幾何学模様が施された貝符などが出土しています。また、2,000年前頃には貝殻そのものが九州地方との交易品として用いられていました。一方、先島諸島の先史時代は、南方の文化の影響があり、シャコガイ製の斧など沖縄諸島とは異なった独自の文化を有していました。

このように様々な道具や創造性豊かな模様を施した貝製品と並び、食糧として捕獲されたイノシシやジュゴンの骨、サメ歯などの骨牙製品もまた同じように道具や装身具として加工されています。

これらの製品は先史時代に生きた人々の知恵と工夫、そして自然や生命に対する畏敬の念までをも感じさせる出土遺物であると同時に、沖縄先史時代の生活と文化、および対外関係を知る上で重要な手がかりにもなります。

本企画展を機会に、多くの皆様が沖縄の先史時代の文化や生活様式に触れ、その素晴らしさを実感すると同時に、貴重な埋蔵文化財について理解を深めることにつながれば幸いです。

2008（平成20）年9月30日

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長　名嘉政修

展示のあらまし

沖縄の先史時代の遺跡から貝殻や動物の骨や角、牙等といった天然素材を加工した道具や装身具等の遺物が発見されています。沖縄貝塚時代早～中期（縄文時代早～晩期に相当する時期）は、骨や角、牙等を加工した錐や針、ペンダント、腕輪等の実用品や非実用品を製作していたことが解っています。

また、沖縄貝塚時代後期（弥生～平安時代に相当する時期）になると、海岸の近くにある砂丘遺跡からゴホウラやイモガイ等の大型の巻き貝殻が一箇所にまとめられた状態で発見されます。それは、九州の弥生人と交易を行うために一箇所にまとめて置いたものと思われます。弥生人は、これらの南の暖かい海でしか採れない自然の貝殻や荒く割った製作途中の貝殻を入手し、幾多の作業工程を経て、腕輪や貝符（札）、ペンダント等の装身具として加工していました。また、沖縄諸島でも九州系の弥生土器や鉄製品、ガラス玉などの素材を加工した遺物が発見されています。すなわち、弥生人が沖縄諸島へ来た証となるものです。

今回、企画展のテーマを『原始人の知恵と工夫—天然素材（貝殻・骨角牙）の活用—』とし、貝殻・骨角牙等の天然素材を用いた錐や針、ノミ、匙等の実用品（いわゆる道具）や、腕輪、ペンダント、ビーズ等の非実用品（いわゆる装身具など）更に、交易を目的に集められたゴホウラやイモガイ等の集積遺構に焦点をあて、原始人の知恵と工夫について、考えてみたいと思います。また、沖縄諸島と先島諸島のそれぞれの特徴もごらん下さい。

本企画展では、当センターが所蔵する遺物を展示・紹介します。また、交易に備えて蓄えていたとみられるイモガイの集積遺構などを再現します。

八重山の考古学編年

なお、今回のパネルや図録等については、沖縄諸島の遺跡は現行編年（沖縄考古学会監修）を用い、先島諸島の遺跡は石垣市史に掲載されている編年（八重山の考古学編年〔石垣市史2007年3月20日発行〕）を用いています。

編年	土器	石器・貝器	陶器器・周辺遺物	立派・石碑	主な遺跡	その他の参考書籍
下田原層 （歩行） "CA106±50 "CA106±50 "/ "CA307±95 "CA309±90 "CA380±100 （複数見出空隙）	下田原式土器	石斧	無し		砂丘背後の 砂丘風化带	後原下り（歩）、第1 層（歩）、ステー ジⅡ（歩）、後原（Ⅲ、 新石器時代後期型）、 下田原式（歩）、 第一層（歩）
					下田原 砂丘風化带	
					大根原 ビュウタ	
無土層 （歩行） "CA170±85 "/ 12世紀前半	無し	貝斧 石斧	開元通寶 中国陶器（北宋末） か壠古墳出土 倭島古墳イ東須志	砂丘	利根第一 大根原 崎松寺崎	後原下り（歩）、第1 層（歩）、ステー ジⅡ（歩）、後原（Ⅲ、 新石器時代後期型）、 砂丘風化帶（歩）、 第一層（歩）
新里村期 （歩行） "/ 13世紀	新里村式土器 ビロースク式土器	石斧種か	中国陶器（北宋末～ 南宋）が少量出土	佐渡上や平 野 石川が登場	新里村家 ビロースク のり・3層	同上 同上 （歩）、スク時代前 期（人）
中森層 （歩行） "/ 13世紀初	中森式土器	無し	中国陶器（元～明） が大量出土	佐渡上や平 野 石川が登場 花園寺	崎間中森 花園寺西	地蔵（多）、第三期 （歩）、ステー ジⅡ（歩）、後原 （Ⅲ）、川上原式（ 化成期）、スク 時代後期（人）
バナナ層 （歩行） "/ 19世紀	バナナ瓶	無し	唐田・垂葉陶器や八重 山陶器が出土	近世の廢村 や廃村落	新里馬 内山（歩）、大 原（歩）、花園 寺（歩）、川上 原式（化成期）	地蔵（多）、第三期 （歩）、ステー ジⅡ（歩）、後原 （Ⅲ）、川上原式（ 化成期）、スク 時代後期（人）

金武正紀1994「土器一覧土器一土器—八重山考古字彙解説書—」
「南島考古」第14号 沖縄考古学会に加藤修三

石垣市史（金武正紀・石垣久雄・崎山直・石垣博孝）による編年
(2007.3.20 発行) 原図

沖縄諸島の土器編年

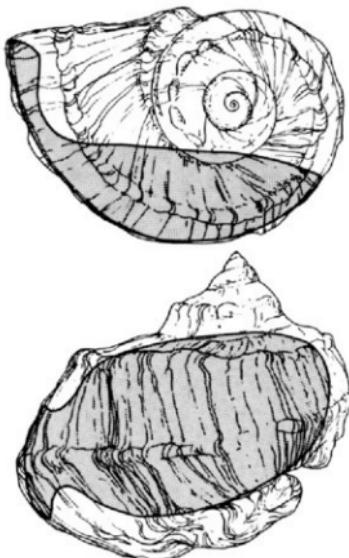
沖縄 現行編年	高宮編年	沖縄諸島の主要土器	九州
貝塚時代	旧石器時代		旧石器時代
		前Ⅰ期	爪形文土器
		前Ⅱ期	条痕文土器 室川下層式土器
		前Ⅲ期	仲泊式土器 面縫前庭式土器
		前Ⅳ期	伊波式土器
			大山式土器 萩堂式土器
		前Ⅴ期	宇佐浜式土器 仲原式土器
		後Ⅰ期	阿波連浦下層式土器 浜屋原式土器
		後Ⅱ期	大当原式土器
		後Ⅲ期	アカヤンガ一式土器
		後Ⅳ期	フェンサ下層式土器
			古墳時代・平安時代

実用品

実用品は狩猟・漁労活動に用いる道具と、日々の生活に用いる道具に分けられます。また、沖縄諸島と先島諸島に共通してみられるものもあれば、先島諸島のみで見られるものもあります。ここでは地域別に実用品の様相を紹介していきます。

沖縄諸島から出土する狩猟・漁労活動用の道具には、貝錐・貝錘・スイジガイ製利器などがあります。貝錐はアコヤガイなどを素材としており、浅瀬の魚を捕るために使用されたと考えられます。貝錘は二枚貝の殻頂近くに穿孔したもので、民俗事例から網の端に錘として結んでいたと考えられます。スイジガイ製利器は突起部の先端を刃先状に研磨したもので、貝を採取するときに使用されたと考えられます。また出土例は多くありませんが、イトマキボラなどの殻軸の先端を研ぎ出したものもあり、スイジガイ製利器と同様な用途であったと思われます。なお、釣針がほとんど見つかっていないことから、釣り漁は盛んではなかったと考えられます。

日々の生活に使用された道具には、骨針・骨錐・貝刃・貝匙・貝皿・ホラガイ有孔製品などがあります。骨針はイノシシの肺骨を加工したもので、針の反対側には糸通しの孔もあけられています。骨錐はイノシシの尺骨やジュゴンの肋骨を錐状に尖らせたものが多くみられますが、大型鳥類の骨や魚類の棘などが使用される例もあります。貝刃は二枚貝の腹縁部をノコギリの歯のように加工したもので、ナイフのように使用されたと考えられます。貝匙にはヤコウガイの体層部を利用した柄杓状の大型品と、クモガイなどの水管溝を利用した小型のものがあります。貝皿は文字通り皿として使用されたと思われるもので、シャコガイの腹縁部を簡単に打ち欠いたもの



参考 ヤコウガイ柄杓状製品使用部位
(木下尚子『南島貝文化の研究』1996より)

が一般的です。ホラガイ有孔製品は、体層部に1～2ヶ所の孔がありますが、民俗事例ではこの孔に鉤を吊してヤカン（煮沸器）のように利用したことがわかっています。実際の製品にも、火を受けた跡が残っているものがあります。

以上が沖縄諸島から出土する実用品の概要ですが、貝塚時代早期前半頃に登場する貝鏃、貝塚時代後期に多い貝匙や貝皿などを除けば、ほとんどが貝塚時代を通じて普遍的にみられるものです。

一方、先島諸島には沖縄諸島と異なる先史文化が展開しており、特に土器を持つ時代（下田原期）から土器を持たない時代（無土器期）に移行する点は他の地域にはみられません。その無土器期を代表する実用品が、シャコガイの蝶番部などをを利用して製作された貝斧です。貝斧は南太平洋諸島に広く分布しており、先史時代から近年まで主に舟造りの工具として使用されたといわれています。先島諸島の貝斧は、形態的な特徴からフィリピンなどの地域に起源があると考えられています。しかし、貝斧以外の実用品については沖縄諸島と大きな違いはみられず、骨・貝製品とも同じようなものが出土しています。この状況は、異なる文化が展開していた両地域であっても、生業に関わる部分では共通点が多くあったということを物語っているのではないでしょうか。



参考 ホラガイ有孔製品の使用例
読谷村立歴史民俗資料館蔵、上原静より写真提供

牧港貝塚



久良波貝塚



百名第二貝塚



久良波貝塚

二枚具有孔製品

シヌグ堂遺跡



仲宗根貝塚



下田原貝塚



長間底貝塚



シヌグ堂遺跡

骨針

骨錐

北原貝塚



野国貝塚B地点

貝鏃



具志原貝塚

ヤコウガイ製貝匙

平敷屋トウバル遺跡

長間底貝塚



シヌグ堂遺跡



スイジガイ製利器



長間底貝塚

ホラガイ系利器

大原貝塚



平敷屋トウバル遺跡

貝 刃

貝 斧



キガ浜貝塚

下田原貝塚



宇佐浜遺跡

ホラガイ有孔製品

螺蓋製敲打器

非 実 用 品

沖縄諸島の先史時代の遺跡から発見される貝殻や骨等を使った遺物の中には、道具として使われたものもありますが、腕輪やペンダントのように飾り物や権威の象徴であったと考えられている非実用品も多く発見されています。これら非実用品の中で、実際に発見された状況から用途が分かっているものは、人骨に着けられた状態で発見された貝輪だけであり、その他のものは、形態や加工の仕方等により身に着けていたものと推測されています。

装身具を含めた非実用品は沖縄諸島の貝塚時代早期までは、数点の出土に留まりますが、貝塚時代前期以降は出土点数及び種類も増加します。貝塚時代前期から中期の特徴的な遺物としては、室川貝塚（沖縄市）、キガ浜貝塚（うるま市津堅島）等から出土している蝶形骨器があり、これまでのところ沖縄諸島でしか発見されていません。発見された状況からは、当時の人々との関係は明確ではありませんが、「人魚」と呼ばれることがあるジュゴンの骨を加工して作られていることや朱（赤色）が塗られているものもあることなどから、特別な製品であったと考えられます。そのほか、貝輪、貝玉、（貝ビーズ）、サメ歯を加工したもの、かんざし簪などが発見されています。使用方法としては、貝輪は、腕などに着けたと考えられ、貝玉やサメ歯製品は、ネックレスの様に使われていたと考えられます。

貝塚時代後期も多くの貝殻や骨などを活用した時期であったと考えられ、貝輪、貝玉、貝符（貝札）などが出土しています。ゴホウラやイモガイの貝輪はこの時期の特徴的な遺物であり、奄美諸島以南に生息するゴホウラやイモガイなどの大型巻貝を加工した製品が、九州以北で発見されています。また、交易のためにゴホウラやイモガイを貯蔵していたと考えられる集積遺構も発見されていることから、九州との繋がりが強くなっていたと考えられます。

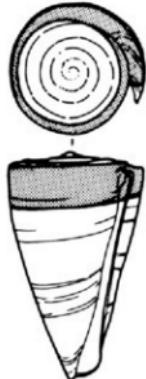
一方、先島諸島では、貝玉やサメ歯製品などが出土していますが、沖縄諸島に所在する遺跡



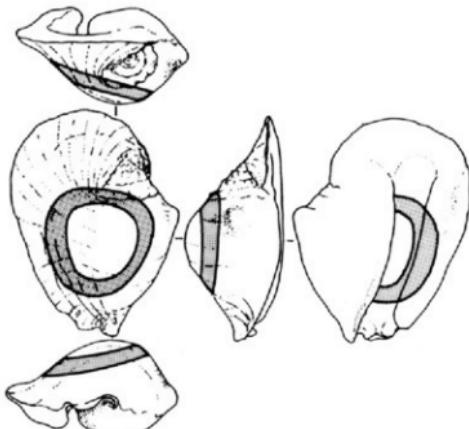
貝輪着装人骨（具志川島岩立遺跡）

と比べると、製品の種類が少ない等の違いがみられます。

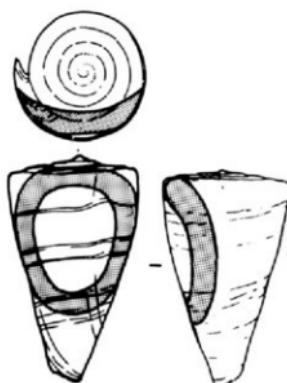
これまで発見された貝殻や骨等を加工した遺物をみると、加工する際に素材の質感、光沢、重量などを活かしながら「どこが薄いのか」、「どこを残したら丈夫なのか」、「どこを削れば、よりきれいに仕上げができるのか」と工夫していたことがわかります。これも先史時代に暮らした人々の経験・知恵であるとともに、現代の私たちに受け継がれているものもあります。



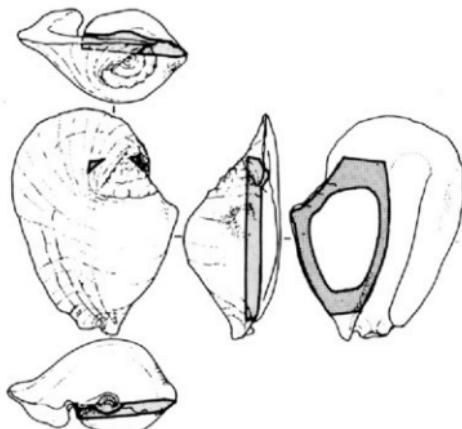
参考 イモガイヨコ型貝輪使用部位
(木下尚子『南島貝文化の研究』1996より)



参考 ゴホウラ大友型貝輪使用部位
(木下尚子『南島貝文化の研究』1996より)



参考 イモガイタテ型貝輪使用部位
(木下尚子『南島貝文化の研究』1996より)



参考 ゴホウラ立岩型貝輪使用部位
(木下尚子『南島貝文化の研究』1996より)

宇佐浜遺跡



小 玉

久良波貝塚



タカラガイ有孔製品

下田原貝塚



イモガイ科装飾品

平敷屋トウバル遺跡



卷具有孔製品

百名第二貝塚



獸形垂飾品

古座間味貝塚



貝 札

地荒原遺跡

具志川島岩立遺跡西区



卷具有孔製品



化石サメ歯 (材料)

下田原貝塚



サメ歯有孔瀬品

地荒原遺跡



サメ脊椎有孔製品

牧港貝塚



平敷屋トウバル遺跡



古座間味貝塚



古座間味貝塚



貝 輪

大原貝塚



かんざし
簪

キガ浜貝塚



蝶形骨器

貝の交易

今から、およそ2,000年前、一般に弥生時代と呼ばれている頃、九州では稲作を中心とした本格的な農耕社会になっていました。米作りは大勢の人たちの共同作業で行われるため、必然的に人々が集まり、ムラやクニを形成していました。その中で富を貯え、権力のある者がムラやクニを治め、長（おさ）として君臨していました。彼らは自分の権威を象徴するために、いろいろなことを行いました。そのひとつに、大型の巻貝でつくった貝輪（今で言うプレスレット）を腕にはめ、他の人たちとは違うということを見せつけて、権力を誇示していました。九州各地の遺跡（お墓）から、貝輪をはめた人骨が見つかっていることから、このような状況がうかがえます。

さて、彼らが腕にはめている貝輪ですが、大型の巻貝で作られており、その貝は九州には生息していません。それはゴホウラやイモガイと呼ばれる貝で、奄美以南の暖かい海に生息していて、現在でも見ることができます。九州のムラやクニの権力者たちは、それらの貝を入手すべく、九州で航海技術に長けた海人たちに依頼して貝を手に入れていたと思われます。海人たちは巧みに舟を操り、トカラ列島や奄美諸島の島々を伝って、ゴホウラやイモガイを求めて沖縄まで南下してきました。

ただ、これらの貝、特にゴホウラはリーフ外海の水深10～20mの深いところに生息しており、容易に採れるものではないことから、沖縄の人々に採取を依頼していたと思われます。そのため、沖縄の人々への見返りとして様々な物々交換が始まったことでしょう。当時の沖縄は未だ農耕は行っておらず、依然として海で魚や貝などを採ったり、山でイノシシを狩ったり、木の実などを採って生活をしていました。その中で、貝と交換する品物は米などの食料や鉄器、ガラス玉などの珍しい品々であつたと思われ、交易は沖縄の人々にとっても大きなメリットがありました。それを裏付



イモガイの集積遺構（伊江村具志原貝塚）

ける資料として、この時期の沖縄の遺跡から鉄器やガラス玉などが見つかっています。

このように、ゴホウラ・イモガイをめぐる交易は盛んに行われていたようで、沖縄本島や周辺離島の遺跡から弥生時代の九州の品物が数多く発見されています。また、遺跡からゴホウラやイモガイが数十個から百個あまりまとまって見つかることがあります。それは、交易のために一生懸命貝を探って貯めて（ストック）いたものと思われます。この交易は、沖縄の人々が九州に持参するのではなく、九州からの海人たちによって運ばれていたため、連絡する手段のない当時、沖縄の人々はひたすら待ち続けていたわけです。しかし、ある時期になると、いつまでたっても北からの交易人たちは現れず、仕方なく大事に貯めていた貝を放棄して、ムラを後にしたと思われます。遺跡から見つかる多くの貝の集積遺構は、それを如実に物語っています。

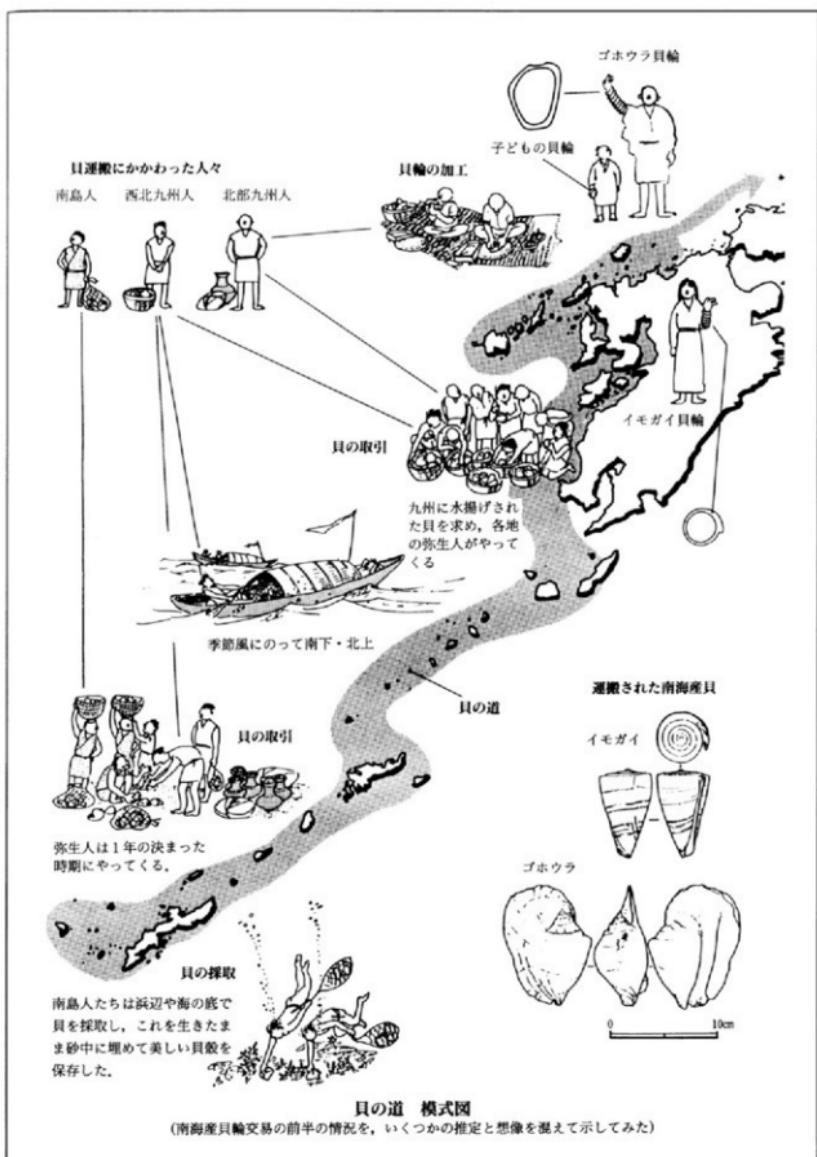
交易により北部九州へ運ばれたゴホウラ・イモガイは相当の量にのぼり、九州ばかりではなく、中国地方や東海地方にも伝わっています。最終的には北海道まで渡り、当時の人たちの南海産貝への執着が大きかったことがうかがえます。北海道（伊達市有珠モシリ遺跡）から見つかったイモガイの貝輪は補修のための穴があけられており、破損したあとでも貴重品として大事に扱われていたことが考えられます。

この貝交易は、沖縄に多くの弥生時代の品物がもたらされ、当時の文化に多大な影響を与え、また、九州などの地域では貝の流通によって、彼らの南海に抱く憧憬が大きく膨らんでいったことと思われます。

前にも述べたように、貝交易のルートには奄美諸島やトカラ列島の島々があり、ゴホウラやイモガイは、それらの島伝いに九州まで運ばれていたのです。この島伝いルートは『貝の道』とも称されています。



ゴホウラの集積遺構（古座間味貝塚）



「貝の道模式図」木下尚子氏原図

おわりに

先史時代の沖縄は、貝類をはじめ魚類、動植物など多種多様な自然の恵みに彩られていました。古代人はこれらを食料として享受する以外に、日々の暮らしを便利にする道具や、豊かな精神世界を表現する装身具として、文字通り余すところなく活用していたのです。

今回の企画展では天然素材（貝殻・骨・角・牙）で製作された道具を用途別に紹介しましたが、その随所に先人の「知恵と工夫」を感じ取ることができます。

彼らは、加工対象である天然素材（貝殻・骨・角・牙）の特徴をよく把握していました。完成した製品を観察すると、素材の自然形態をうまく活かすように加工しているものが多く、どの場所が加工に適しているのか、どこを残せば強度が保たれるのかという点についても、経験的に理解していたと考えられます。例えば骨針・骨錐・貝刃・貝皿・スイジガイ製利器・ホラガイ有孔製品など実用品の多くは、素材の自然形態を巧みに利用しながら、一部に効果的な加工を施して製作されています。またヤコウガイ製貝匙やゴホウラ・イモガイ製貝輪などは、素材の中に完成品をイメージしていたと思われます。

また、出土する貝製品の圧倒的な多量さは、素材の得やすさと、骨や牙に比べて加工が容易であるという特性を利用した証ということができます。

ところで、貝輪の素材として重宝されたゴホウラは、貝交易が隆盛した貝塚時代後期前半頃を除くと、沖縄ではほとんど利用されていません。これは、貝交易が行われた時期に集中して採取されたためと思われますが、別の見方をすれば貝輪製作に最適な材料を探した結果、地元の需要が少ないゴホウラにたどり着いたとも考えられます。このことも、素材の持つ特徴を理解していた一例といえます。

自然とともに生き、自然の恵みに感謝しながら、天然素材を存分に利用していた原始人の姿勢は、現代に生きる私たちにも参考になる点が多いのではないかでしょうか。今回の企画展を通じて原始人の生活に思いを馳せるとともに、私たちの生活と天然素材との関わりについて考える機会となれば幸いです。

展示遺物の出土した遺跡





《参考文献》

- 安里嗣淳・岸本義彦 2001『沖縄県史ビジュアル版7 考古② 貝の道－先史琉球列島の貝交易－』
沖縄県教育委員会
- 安里嗣淳・ほか 2003『沖縄県史 各論編第二巻 考古』沖縄県教育委員会
- 東憲章・ほか 2006『図録 特別展 貝の来た道～東の道は存在したか～』宮崎県立西都原考古博物館
- 上江洲均 1973『考古民俗叢書(12) 沖縄の民具』慶友社
- 上原靜 1981「いわゆる南島出土の貝製利器について（特にスイジガイ製利器とホラガイ系貝製利器について）」『南島考古第7号』沖縄考古学会
- 大阪府弥生文化博物館 1994『一平成六年秋季特別展－サンゴ礁をわたる碧の風』大阪府弥生文化博物館
- 沖縄県教育庁文化課 1978『沖縄県文化財調査報告書第17集 津堅キガ浜貝塚発掘調査報告書』
沖縄県教育委員会
- 〃 1980a『沖縄県文化財調査報告書第32集 大原一久米島大原貝塚群発掘調査報告』沖縄県教育委員会
- 〃 1980b『沖縄県文化財調査報告書第33集 仲宗根貝塚 第一・二次発掘調査概報』沖縄県教育委員会
- 〃 1981a『沖縄県文化財調査報告書第37集 名護貝塚群発掘調査報告』沖縄県教育委員会
- 〃 1981b『沖縄県文化財調査報告書第38集 百名第二貝塚の試掘調査』沖縄県教育委員会
- 〃 1982『沖縄県文化財調査報告書第43集 古座間味貝塚 範囲確認調査報告書』沖縄県教育委員会
- 〃 1983『沖縄県文化財調査報告書第48集 伊江島阿良貝塚発掘調査報告』沖縄県教育委員会
- 〃 1984a『沖縄県文化財調査報告書第56集 宮古城辺町長間底遺跡発掘調査報告』沖縄県教育委員会
- 〃 1984b『沖縄県文化財調査報告書第57集 野国 野国貝塚群B地点発掘調査報告』沖縄県教育委員会
- 〃 1985a『沖縄県文化財調査報告書第61集 伊江島具志原貝塚の概要』沖縄県教育委員会
- 〃 1985b『沖縄県文化財調査報告書第63集 名護貝塚－県道116号線側溝改修工事に伴う緊急発掘調査報告－』沖縄県教育委員会
- 〃 1985c『沖縄県文化財調査報告書第65集 牧港貝塚・真久原遺跡－県道153号線バイパス工事に伴う発掘調査報告書－』沖縄県教育委員会
- 〃 1985d『沖縄県文化財調査報告書第66集 与那国島トゥグル浜遺跡 与那国空港整備工事に伴う緊急発掘調査報告』沖縄県教育委員会
- 〃 1985e『沖縄県文化財調査報告書第67集 シヌグ堂遺跡－第1・2・3次発掘調査報告－』沖縄県教育委員会
- 〃 1986a『沖縄県文化財調査報告書第74集 下田原貝塚・大泊浜貝塚－第1・2・3次発掘調査報告－』沖縄県教育委員会
- 〃 1986b『沖縄県文化財調査報告書第75集 地荒原遺跡－県道10号改良工事に伴う発掘調査報告－』沖縄県教育委員会
- 〃 1987『沖縄県文化財調査報告書第84集 石川市古我地原貝塚－沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書（6）－』沖縄県教育委員会
- 〃 1989a『沖縄県文化財調査報告書第92集 宮城島遺跡分布調査報告 1. 宮

- 城島の遺跡分布 2. 高嶺遺跡』沖縄県教育委員会
- 〃 1989b『沖縄県文化財調査報告書第93集 宇佐浜遺跡 発掘調査報告』沖縄県教育委員会
- 〃 1992『沖縄県文化財調査報告書第108集 恩納村久良波貝塚－導水管設工事に係る緊急発掘調査報告書－』沖縄県教育委員会
- 〃 1995『沖縄県文化財調査報告書第123集 北原貝塚発掘調査報告書』沖縄県教育委員会
- 〃 1996『沖縄県文化財調査報告書第125集 平敷屋トウバル遺跡－ホワイトピーク地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書－』沖縄県教育委員会
- 〃 1997『沖縄県文化財調査報告書第130集 伊江島具志原貝塚発掘調査報告』沖縄県教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集 新城下原第二遺跡－キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告－』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 岸本義彦・島弘 1985「沖縄における貝の集積遺構－ゴホウラ・イモガイを中心に－」『紀要第2号』沖縄県教育委員会文化課
- 九州国立博物館・ほか（編）『九州国立博物館 2006年 真夏の特別展 南の貝のものがたり』朝日新聞社
- 金武正紀・ほか 2008『石垣市史考古ビジュアル版 第2巻 下田原期のぐらし－八重山諸島最古の土器文化－』石垣市
- 久貝弥嗣 2005「沖縄の縄文時代装身具について」『第15回九州縄文研究会沖縄大会 九州の縄文時代装身具 発表要旨・資料集』九州縄文研究会沖縄大会実行委員会
- 久保弘文・黒住耐二 1995『生態／検索図鑑 沖縄の海の貝・陸の貝』沖縄出版
- 木下尚子 1996『南島貝文化の研究－貝の道の考古学－』法政大学出版局
- 島袋春美 1991「いわゆる「蝶形骨器」について」『南島考古第11号』沖縄考古学会
- 〃 1997「県内出土の「タカラガイ製品」について」『南島考古第16号』沖縄考古学会
- 新里貴之・上村俊雄 1998「南西諸島に分布するサメ歯製品及びその模造品について」『南島考古第17号』沖縄考古学会
- 高宮廣衛・知念勇（編） 2004『考古資料大観 第12巻 貝塚後期文化』小学館
- 盛本勲 1981「奄美・沖縄地方における貝製漁網錐の研究（その1）」『物質文化No.37』物質文化研究会
- 〃 1982「奄美・沖縄地方における貝製漁網錐の研究（その2）」『物質文化No.38』物質文化研究会
- 〃 1985「奄美・沖縄出土の縄文・弥生時代の鹿角骨製品について」『文化課紀要第5号』沖縄県教育委員会文化課
- 〃 1992「南北琉球圏に共通・類似する遺物」『考古学ジャーナルNo.352』ニュー・サイエンス社
- 盛本勲・比嘉優子 1994「沖縄出土の貝包丁様製品について」『南島考古第14号（学会創立25周年記念特集号）』沖縄考古学会

メモ

平成 20 年度企画展
「原始人の知恵と工夫」

— 天然素材（貝殻・骨・角・牙）の活用 —

2008（平成 20）年 9 月 30 日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター
住所 沖縄県中頭郡西原町上原 193-7
電話 098-835-8752
FAX 098-835-8754



第31回文化講座

ヤコウガイ交易と沖縄

講師：木下尚子（熊本大学 教授）

骨角牙製品から見た沖縄の先史時代

講師：盛本歎（県教育庁文化課 主幹）

【日時】 10月4日（土）午後1時30分～4時30分

【場所】 沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室



●開所時間 午前9時～午後5時まで（入所は午後4時30分まで）

●休所日 毎週月曜日、国民の祝日（こどもの日、文化の日を除く）

年末年始（12月28日～1月4日）、慰靈の日（6月23日）

※祝日と月曜日が重なった場合は、翌火曜日も休所

◇沖縄自動車道西原ICより車で7分

◇市外線バスターミナル発 那覇バス97番

「琉大附属病院前」下車徒歩1分

